

## 第0次世界大戦（日露戦争）

2018.9. 2

横浜歴研 瀬谷俊二郎

### 序章 国際情勢

- (1) 19世紀末から20世紀初頭にかけて帝国主義が世界の潮流となっていた。
- (2) 先進資本主義国（イギリス、フランス、オランダ）と遅れて帝国主義の段階に入った（アメリカ、ドイツ、ロシア、日本）などの植民地獲得を巡る対立激化は戦争の原因となった。
- (3) 日露戦争は、日本とロシアが戦っただけでなく、日本の同盟国イギリスやロシアの最大の債権国フランスはもとより、1998年の米西戦争でキューバとフィリピンを手にいれハワイをも併合し、大西洋と太平洋の覇権を狙うアメリカ、さらに戦場となった清国と韓国、それにドイツやポーランド、フィンランドほかの北欧諸国までが絡んでの一大国際戦争であった。
- (4) これら関係国の駆け引き、巨額の戦費、大軍の動員、陸海軍の連携、情報・宣伝戦や内部攪乱等は従来の2国間戦争とは大きく様相が違っていた。
- (5) 因みに、当時の関係各国の情勢は以下の通りであった。
  - ・ロシア：満洲、遼東半島の支配を強化し、シベリア鉄道の完成により中国での立場強化を強めていた。朝鮮半島北側について日本の勢力強化を嫌い緩衝地帯化を要求していた。南下政策の下、国は膨張志向であったが体制は帝政で国民の不満は増えつつあった。
  - ・日本：ようやく国力をつけ始めた時期で、ロシアに対抗するため日英同盟を締結するなど国際世論を味方にロシアとの対決姿勢を強める方向に向かった。
  - ・英国：ロシアによって自国の権益が侵されることを警戒し、日本を支援し第三国の参戦をけん制するなどの目的で、“栄光ある孤立”を捨て日英同盟に進んだ。内情では、アフリカのボーア戦争などで国力も疲弊していた。
  - ・米国：中国への進出で出遅れたため中国市場における機会均等・門戸開放を主張しロシアの拡大を警戒していた。後ほど日露戦争の仲介に至る。
  - ・フランス：ロシアと同盟関係で、英国とはアフリカ植民地獲得面で対立していた。

## 第一章 戦費調達

戦争遂行には莫大な資金を必要とする。資金量は戦争期間にもよるが、国家予算の数倍の資金準備がなければ戦争はできない。

日露戦争の戦費総額は 18 億 3000 万円とされており外債発行は借り換えを含め

1904～1906 年で総額 1 億 3000 万ポンド（約 13 億円弱）である。

1903 年の一般会計歳入が 2.6 億円であることを考えると如何に巨額な資金を外債に頼らざるを得なかったかがわかる。

この外貨調達を担当したのが、当時の日銀副総裁、高橋是清であった。

開戦とともに日本の既発の外債は暴落しており、初回発行の 1,000 万ポンド外債の引き受け手は見つけにくい状況であった。

高橋は同盟国英国のロンドンに赴き銀行団との 1 ヶ月以上の難交渉の結果、額面 100 ポンドに対し額面 93.5 ポンドまで値下げし、日本の関税収入を抵当とする好条件で漸く 500 万ポンドの外債発行の目途がたった。

このロンドン滞在中に高橋が知り合ったのが、ドイツ出身のユダヤ系アメリカ人銀行家ジェイコブ・シフであった。

シフは NY の投資銀行クーン・ローブの首席代表でヨーロッパ旅行の帰途、銀行団との仮契約祝賀の宴に招かれ、高橋の隣に座った。

ロシアとの経済的柵がなく、またポグロムを快く思っていなかった彼は、日本の経済状態、生産状態、開戦後の人心等こまかく聞いた後、残りの 500 万ポンドを引き受けてアメリカで発行することを決めた。

シフは残額 500 万ポンドの外債を引き受けたばかりでなく、アメリカ金融界で追加融資を調達する便宜まで図った人物である。

この時、アメリカでは鉄道王ハリマンも先頭に立って日本の国債を買い支えた。

渡りに船の観があった NY の参加は、応募状況を好転させ好戦況とともに大成功の裡に初回発行を終えた。

第 2 回（1904.11）、第 3 回（1905.3）と金利も引き下げられ、第 3 回からはドイツ系銀行団も参加する等募集は盛況となった。

戦後叙勲のため明治天皇に招かれたシフは 1906.3 月に日本に滞在し、“Our Journey to Japan”を著している。

## 第二章 戦況

当初、日本は外交努力で衝突を避けようとしたが、ロシアは強大な軍事力を背景に日本への圧力を増していった。

戦闘は 1904.2.8 日本海軍駆逐艦のロシア旅順艦隊に対する奇襲攻撃で始まった。2.10 に日本政府からロシア政府への宣戦布告がなされ 2.13 に日本と大韓帝国との間で日本軍の補給線の確保を目的とした日韓議定書が締結された。

日本側の基本戦略は海軍が旅順にいるロシア太平洋艦隊を殲滅ないし封鎖しその後陸軍が朝鮮半島へ上陸、在朝鮮のロシア軍を駆逐し遼東半島へ橋頭保を立てて旅順を孤立させ、満洲平野にてロシア軍主力を殲滅する。海軍によるロシア太平洋艦隊の殲滅はバルチック艦隊の到着までに行うというものであった。

増援を頼みとし正面衝突を避けて旅順港に待機したロシア艦隊に対し、日本海軍は旅順港の出入り口封鎖を企てたが成功せず、さらに機雷による封鎖策を実施したがこれも失敗した。

海軍は陸軍に旅順艦隊を旅順港より追い出さるか壊滅させるよう正式要請を行い、陸軍は要塞攻略を主任務とする第 3 軍をこれに充て多くの死傷者をだしながらも 12.4 に旅順港内を一望できる 203 高地を占領した。

第 3 軍は要塞攻略を続行し 1905.1.1 に至って旅順要塞司令長官ステッセルは日本軍への降伏を申し入れた。

この戦闘で第 3 軍を指揮した乃木将軍は 2 人の息子を失い、日本軍は延べ 13 万名兵力を投入し死傷者は約 6 万名に達したといわれている。

日本軍は、ロシア軍の拠点・奉天へ向けた大作戦を開始、2.21 に攻撃を始めた。

日本軍は側面、背面も合わせ全軍を投入し、ロシア軍も予備まで投入して戦ったが 3.9 にロシアのクロパトキン司令官が撤退を指示し、日本軍は奉天を占領したもののロシア軍撃破には失敗した。

この時点で日本はアメリカに和平交渉開始を依頼したが、バルチック艦隊に期待を寄せるロシア側はこれを拒否した。

7ヶ月に及んだ航海を経て日本近海に到達したバルチック艦隊は 5.27～5.29 に日本海軍と日本海海戦を行ったが、結果は艦艇のほとんどを失い司令長官が捕虜になるなど壊滅的な打撃を受けた。

この時点でロシア側もようやく和平に向けて動き出した。

日本軍は和平交渉の進む中、7月に樺太攻略作戦を実施し、全島を占領した。

### 第三章 内部攪乱と諜報

ロシアの資本主義は 1861 年の農奴解放以後徐々に発展し、1894 年のロ仏同盟成立後フランス資本の援助のもと重工業を中心に急速に発展した。

ヨーロッパと極東を結ぶシベリア鉄道は 1891 年に始まり 1905 年までに東清鉄道と結ぶ線が完成し、シベリア開発や極東政策の推進に大きな役割を果たした。

資本主義の発達とともに都市では大工業が成長し、工場労働者の数が急増する中で低賃金などの劣悪な労働条件に苦しむ労働者の間には社会主義思想が広まった。

そして 1898 年には、プレハーノフやレーニンらによってロシア社会民主労働党が結成されたが、政府の弾圧を受け指導者の多くは国外に亡命していた。

ロシアは、1809 年にスウェーデンからフィンランドを奪い、1832 年にはポーランドを併合、1868 年ブハラ＝ハン国を 1873 年にはヒヴァ＝ハン国を保護国にするなど急膨張を続けており、フィンランドやポーランド人の祖国独立のための地下活動も盛んでロシアの国内外はかなり緊張が高まっていた。

かかる状況下でヨーロッパ全土の反帝組織に働きかけ日本陸軍最大の謀略戦を行ったのが明石元二郎大佐である。

1902.8、明石はペテルブルグにあるロシア公使館付武官を命じられたが開戦に伴い、1904.2 公使館職員一行とともにスウェーデンのストックホルムに移った。

この地には反ロシア活動家たちに大きな影響力を持つフィンランド憲法党のカストレンが亡命しておりカストレンと接触しようとした明石は、その親友であり、後のフィンランド過激反抗党の党首となるコンニ・シリアクスと知り合うことになった。明石は諜報とロシア革命勢力支援の任務を帯びて、参謀本部から当時の金額で 100 万円の工作資金を支給されていた。

明石はシリアクスと組んで、ロシアの侵略を受けていた国の反乱分子を糾合し、さらにロシア国内の革命政党エスエル（社会革命党）等に資金援助を行いロシア国内の反戦、反政府運動の火に油を注ぎ、ロシアの対日戦争継続の意図を挫折させようとした。

血の日曜日事件と第 1 次ロシア革命：1905.1.22 憲法制定、日露戦争の中止等を求めてガボン神父が計画した請願行進に対し皇帝の軍隊が発砲し多数の犠牲者を出した。この知らせはロシア全土に広がり各地で農民の反乱が頻発、6 月にロシア黒海艦隊戦艦ポチョムキン号で水兵が反乱、10 月には大規模なストライキが行われ国内の様々なインフラが停止した。

#### 第四章 講和とその後

日本は奉天（瀋陽）を占領はしたが継戦能力（武器・弾薬・士官）はなくなっており、ロシアも血の日曜日事件以降の国内の混乱や国際世論のたかまり等があったようやく講和への機運が出てきた。

日本海海戦で勝利した機会をとらえ日本はアメリカ大統領セオドア・ルーズベルトに正式に斡旋を申し入れた。ルーズベルトは大の親日家であるとともに、アメリカの満洲、蒙古、沿海州等への権益確保の為にも開戦当初から日本支援を公言していたし、またユダヤ人協会長で銀行家のシフや鉄道王ハリマンが日本の国債を買い支える等アメリカは国として非常に日本に好意的であったことは前述の通りである。因みにルーズベルトは日本が交渉を有利に進めるため、樺太占領を示唆したといわれている。

ルーズベルトの親日については、数年前に世界的なベストセラーとなった新渡戸稲造の“武士道：The Soul of Japan”やハーバード大学同期の金子堅太郎の働きかけの影響も大きいといわれている。

講和会議の交渉は難航した。

1905.8.1 から始まり 9.5 の調印まで会議は 17 回にわたって開かれ、ロシア軍の満州からの全面撤退には同意させたものの領土と償金の要求は一切受け付けられなかった。

小村は談判打ち切りの意を日本政府に打診したが、政府は御前会議を経て領土・償金の両方を放棄してでも講和を成立させるべしと応答した。

ニコライ 2 世が最後に見せた樺太の南半分割譲という譲歩により講和が成立した。

ウイッテは、“日本は全部譲歩した”とささやき、ヨーロッパの新聞は“日本は人道国家である”と賞賛し、日本政府は“開戦の目的を達した”との記事を書き、ロシア軍部は強い不満を表明した。

ロシアは海軍を失ったもののシベリア鉄道を利用して陸軍を増強することが可能であり、新たに増援部隊が加わって、日本軍を圧倒する兵力を集めつつあった一方で日本の継戦能力は底をついていた。

日本国内では、多額の戦費を負担し、12万人近い死傷者を出しながら賠償金を得ることができなかったことに国民感情はとても満足できなかった。

調印当日 9.5、東京の日比谷公園で開かれた「講和反対国民大会」はさながら暴動と化し、市内の交番の7割、邸宅53戸が焼かれ、死傷者は1000名以上に上った。

.....

講和後の舞台はロシア撤兵後の満州に移る。

賠償金の取れなかった日本政府は、多額の戦費負担を残し、東清鉄道の南部支線（南満州鉄道）の経営は不可能な状態であった。

一方、アメリカの鉄道王エドワード・ハリマンは世界一周鉄道網の夢があり、南満州鉄道を1億円で買収し、シベリア鉄道経由でヨーロッパに至るアジア大陸横断鉄道を構想していた。

1905.8.31 に横浜についたハリマンは首相桂太郎をはじめ渋沢栄一等の支持を得て、10.12 には、南満州に関する日米シンジケートを組織する予備協定覚書を交換した。

10.16 帰国した小村は講和条約を不満とする国民の怒りに驚愕して桂に説いた。

「講和条約で辛うじて得た権益を日米シンジケートに売り渡す計画に民心は激高し、大騒擾を引き起こすかもしれない」と

小村は精力的に働き、南満州鉄道経営に方策あることを説きハリマン案を潰した。

小村は、ハリマン＝シフと対立するモルガン商会から融資を受けることにして満洲の権益は日本が独占する方向へ進んだのである。

日本を支援してきた英米は、ロシア撤退後の満州への門戸開放を日本に求めたが、日本は外国に対する閉鎖政策をとり続けたため 1906.3.26 「満洲の門戸閉鎖に関するアメリカの抗議」が送られてきた。

このようにしてルーズベルトの後を襲ったタフト政権が期待した満洲の門戸開放は実現されず、日米関係は悪化したまま、アジア太平洋戦争へと突入していく大きな端緒となった。

完

#### 参考文献

##### Wikipedia

日露戦争の秘密     デー・ベー・パヴロフ／エス・アー・ペトロフ（左近毅 訳）  
成文社     1994

明石工作—謀略の日露戦争     稲葉千晴     丸善ライブラリー     1995

日露戦争に投資した男     田畑則重     新潮新書     2005

世界の歴史を変えた日本人     清水克之     桜の花出版     2009

間諜二葉亭四迷     西木正明     講談社     1994

高橋是清—財政家の数奇な生涯     大島清     中公新書     1999

小村寿太郎     黒木勇吉     1968 刊の抜粋

武士道     新渡戸稲造     岩波文庫     2007     （矢内原忠雄 訳）